

# UIFA JAPON

## NEWSLETTER

### ■主な内容

UIFA会長ド・ラ・トゥールさんの手紙

私の考える環境共生時代 工業地域

まちづくり・住まいづくりと居住者参加

住まい

第12回海外交流の会

ドキュメント2 UIFA日本大会に向けて(1997年1月29日~1997年3月20日)

会員の自己紹介 №5

### ■UIFA会長ド・ラ・トゥールさんの手紙

U. I. F. A.

UNION INTERNATIONALE DES FEMMES ARCHITECTES  
SIÈGE : PARIS-XVII<sup>e</sup>, FRANCE - 14, RUE DUMONT D'URVILLE -

Tél : 01.47.20.88.82 Fax: 01.47.23.38.64

Paris, January 1997.

The International Union of Women Architects U.I.F.A.,  
is sending you their :  
BEST WISHES FOR A HAPPY AND WONDERFUL NEW YEAR 1997.

The year 1996 was marked by the organisation of our XIth. Congress,  
which took place in Budapest (Hungary).

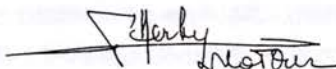
During this Congress, which proved to be a great success, many of  
our members were able to meet once more, to discuss, to exchange their  
ideas and impressions and to think over the future of our profession.

We hope to have the pleasure to assemble again in September 1998,  
during the meeting of our next XIIth. U.I.F.A. Congress who will take  
place in Japan. The theme will be " People, Architecture and Cities, in  
an age of harmony with the Environment".

As usual, U.I.F.A. tries to diversify our meeting place, so as to  
facilitate the participation our members of countries situated nearer  
to the Congress locations. We hope therefore to have this time a larger  
participation of delegates from the Asian and Pacific countries, for  
whom sometimes it is difficult to come to our other meetings.

During this next Congress, the important problems of the balanced  
and harmonious development will be widely discussed, as we do not have  
to be concerned only by the built-up areas (cities, towns, villages), but  
also by their position in the Environment and their harmony with the  
surrounding nature.

Japan is a country of great tradition, where in addition to our  
work and discussions, we will have the possibility to discover places of  
wisdom and an old civilization.



On behalf of the Council of U.I.F.A.  
S.d'Herbez de la Tour.

パリのUIFA本部の会長ド・ラ・トゥールさんから、1997年1月付けの新年の挨拶状が、中原会長をはじめとする主な理事の方々  
に送られてきました。その内容をご紹介します。

「昨年のハンガリー大会では、多くの会員が再会して意見を交換し、私たちの職業の未来について考えることができて大成功をおさめました。1998年9月には日本で第12回大会が開催されます。テーマは“People, Architecture, and Cities, in an age of harmony with the Environment (環境共生時代の人・建築・都市-21世紀における調和的關係の構築を目指して-)”です。UIFAでは、より多くの会員が大会に参加できるよう開催地を選んできました。今回、日本で開催されることで、アジアや環太平洋の国々からの沢山の参加があることを期待しております。調和のとれた発展という重要な問題を幅広く討議し、また、構造物のある都市や町に係わる問題だけでなく、環境や自然との調和についても考えたいと思います。日本は偉大な伝統の国です。私達は仕事や討論の場に限らず、いたるところで英知と文明の場を見出すことができるでしょう。

UIFA役員を代表して、ド・ラ・トゥール

この手紙にはさらにアンケートが同封されていました。その内容は、1988年日本大会への参加意思の有無、参加人数、プレゼンテーションの有無、ポストコングレスツアー参加の有無、2000年開催予定の大会希望開催地などです。

(候補地 ヴェニス、ルクセンブルク、コートダジュール、メキシコ、ヨルダン、オーストラリア など)

これは、あくまでUIFA本部として参加人数を把握して予算や参加費用の概算を知るためのアンケートであって、参加申込書ではありませんが、このようにUIFA本部の方でも日本大会に向けての準備が始まっていることがわかります。世界各国の会員の期待に応えられるよう、大会準備に会員の多くのご協力をお願いするところです。なお、このアンケートの回答については、UIFA JAPONでまとめて行う予定です。

## ■私の考える環境共生時代の工業地域

鹿島 建築設計部 山田規矩子

壊れてしまった器の水は、もう元には戻らない。

1960年代に始まった日本の高度経済成長時代に、私達はどれ程、激しくかつ広範囲に日本の自然環境を破壊してしまったことだろう。山を削り、谷を埋め、白い砂の波打ち際を埋め立てて、次々と大きな工業団地が造られていった。日本が経済的に発展していく為には、どんどん工業団地を造成し、造られた工業団地は次々と工場で埋めつくし、工業生産を上げていかなければならない——政治家を先頭に、日本人の誰もがそう考えていた。失われた自然を悼む事は、消極的な後ろ向きの姿勢をとる事とみなされた。

今、約30年続いた成長・拡大の時代が終わり、脳目もふらずに走り続けていた人々が、速度を落とし歩き始めている。力強く、たくましい男達の先頭集団が速度をゆるめると、後ろからゆっくりと歩いている人々が見えてくる。まわりの景色も見えてくる。環境にも配慮をする事が、前向きの姿勢とみなされる風潮も出てきた。工業地域にも、環境共生時代が始まろうとしている。

“環境と共生する工業地域”と言えば、緑の多い工場、煙も騒音も無い明るい工場、といったイメージが目に見えよう。緑地面積の比率が高く、公害を発生しない工場である事は当然である。それよりも、工業地域における今後の環境の問題は、地球規模で考えなければならぬだろう。エネルギー消費を抑え、CO<sup>2</sup>の発生を抑える事は大きな課題である。発展途上国で、人口が変化し、農村が都市化し生活水準が上がってくると、地球全体のエネルギー消費量は増加する一方であろう。一般の人々が、すでにある生活水準に達している国々では、自らのエネルギー消費を極力抑え、発展途上国に手を貸す位であって欲しい。

リサイクル型工業生産システムの構築、この言葉は、ここ数年耳にするようになった。使い古したものを再生するよりも、新しく作った方が安い、使い古したものは捨てるか燃やせばよい、という従来の考え方を改めていかなければならない。リサイクルの閉じた輪はまだまだ小さく、一業種、一企業内にとどまっている。リサイクルの輪を生産システム全体にひろげる事は、あらゆる工業生産の仕組みを視野に入れて考察しなければならないだろう。このリサイクルの輪は一般市民の生活の仕方も巻き込んだ大きなものになるだろう。廃品を回収して工場へ送り届ける新たな物の流れが発生し、社会全体の物の流れに大きな変化をもたらすだろう。

目に触れる自然を大事にする事と、工業地域で行われている生産のシステムを変えていく事は、環境共生という一つの歌を異なる声で歌っているようなものなのだ。



## ■環境共生時代のまちづくり・住まいづくりと居住者参加

住宅・都市整備公団 牛山 美緒

住都公団ではこれまでにさまざまな環境負荷の低減への試みがなされてきているが、そのなかの代表的なものをご紹介します。

まず、多摩ニュータウンの長峰杜の一番街～五番街だが、これはニュータウン内でも最も緑の多い稲城市域において、建設省の「環境共生住宅市街地モデル事業制度」を活用して建設された集合住宅である。約11haのブロックで、平成7年に街びらきをした。稲城市はこの地域を「緑の環」と位置付けており、当敷地がそのグリーンベルト内にあることから、周辺との緑地をつなげる住宅地計画の提案に結びついた。もとの地形や生態系を尊重し、緑地面積の確保を設計方針とした。そのため住棟を高層化することにより、敷地の中央部にかなり大規模な芝生の広場をつくりだすことができた。造成もなるべく斜面として擁壁を少なくし、壁面緑化、雑木林の再生、透水性舗装による雨水の地下浸透、建替団地で発生したコンクリート塊の路盤への再利用、梁とスラブが一体となった偏平梁（フラットスラブ構造）による通風・採光の工場、パッシブソーラー・アクティブソーラー、そして居住者がハーブなどを育てることができるコミュニティーガーデンなどを試みた。これらをパンフレットなどで居住者に伝え、環境への興味を持ってもらう働きかけもした。

一方、居住者参加型でつくる集合住宅「きらきらプロジェクト」は、多摩ニュータウンの戸建て住宅街区内に散在する9つの小規模敷地に予定されている。グループ分譲住宅（コホーティブハウジングの公団版）で、区画ごとにテーマがあり、屋上緑化や自然エネルギー利用の「環境共生住宅」以外にも、「協同子育て住宅」二世帯住戸や高齢者相互扶助のある「多世代居住住宅」、自分で内装のできる「DIY住宅」、「ペット共生住宅」などが企画されている。5月頃、入居希望者グループを募集する予定。環境共生のまち・住まいづくりを考えると、やはり住まい手を抜きには考えられない。

一昨年に、ちば緑化フェアでの公団パビリオンとして、環境共生をテーマとした「かるがも館」を出展した。建物を自然素材でつくり屋上も緑化し、環境共生に関する展示を行った。またワークショップとして、「(和紙の) 壁紙を貼ってみよう」「土塗り壁をぬってみよう」\* という企画があり、職人さんに教えてもらいながらのチャレンジは、参加者に好評であった。私も参加したが、道具や「技」に触れるよい経験となった。塗り壁の仕上がりの表情が塗り手によって全然異なり、それぞれの性格を表していて興味深かった。

地球環境を考えるにあたっては、一人ひとりが問題意識をもつことが大切だと思う。国際的に交流できる機関であるUIFA。そのような場で仲間と地球レベルで考え、そして日常生活の場で身近なことからまず一人で、また地域の仲間とともに行動していくことが必要だろう。例えば緑化、ごみ、リサイクルの問題などは地域に根づいた活動が基本になろう。そのためにも住まい手が自分の地域に関心をもつこと、近隣とともに行動できる知り合いをつくるのが欠かせない。関心をもつためのきっかけづくり、コミュニティづくりのソフト支援も合わせて取り組んでいくことが必要だと思う。



「土塗り壁をぬってみよう」\*

9410082 川崎 裕子

大学を卒業し、設計を始めてから30年余となります。その後研究活動も加えながら大学院に戻るなどの寄り道をして、現在の職について10年余となります。ここ10年位は、ほぼ毎年何回か海外に出て町や住居をはじめ、人々の暮らしを観察し、私たちとは根底から異なる様々な文化に触れてきました。そして、建築住居計画、建設に携わる者同士、特に女性同士の交流、情報交換、連携はすべての人の幸せな住環境形成の大切な条件になりうるものと思ひ、このUIFAに参加いたしました。



95年8月から96年2月の約7ヶ月は、大学のサバティカルイヤーの機会を得てドイツのボン大学に留学しました。ドイツの町の心地の良い大きさ、町並みの美しさ、快適な住居は長年の歴史の中で培われた豊かな暮らしを感じさせます。家庭でも学校でも幼いうちから住まい方のしつけ、教育が行われていますから住居に対する関心はとても高く、その意識が住空間の質を引き上げている要因ともなっています。

翻って、わが国の実情はいかにも見劣りがします。最近でこそ自然の保護・町並み・景観といった問題をなんとかしようなど、自分の住む空間の質を問う意識が高まってきましたが、そのような動きは全体的に十分に機能しているとは思えません。私自身地域や行政の中でこれらのことに少しでも役にたてたらと願いつつそんな仕事もしております。

9410069 小島 久実

日本女子大と西生田キャンパスのある川崎市の地域教育への協力から発生しました「かわさき市民アカデミー」の生活系、居住福祉コースの演習をはじめ3年になります。本来大切な要素でもあったにもかかわらず注目されにくかった高齢者や障害者の居住環境に関する配慮が近年ようやく社会に居住権を得られるようになってきた実感を持つと共に、一般市民(30代~70代の男女)の方々のエネルギーの大きさを受けとめながら日々勉強の毎日です。



又、同期3人で協力しておりますT・L・C(トータル・ライフ・クリエーション)と生活術セミナーをこの数年つづけ、真の意味での楽しく、美しく、合理的な生活の実際を共に学び、実行していく事を目指して細々ながら活動しています。

振り返ってみますと現在につながる私の原点は卒業直後に地域環境研究会(小川信子先生他)に参加する事が出来、地域、人間、家族、福祉をめぐる気鋭のメンバーの討論(現在となえられている事と少しも変わらない)を吸収できた事です。それはその後の地域調査等の際のバックボーンとなり、現場をはなれていました数十年の間も何らかの形で持ちつづけていたのだと近頃再認識して居ります。途中しておりました宝石のデザインもデザイナーだけには成り切れず、納得できないものを感じたのもそのための様に思われます。

9210012 古村 伸子

大学卒業後、主に都市計画の分野で仕事をしてきました。初めてかかわったのが東京郊外の公共用地跡地利用についての調査でした。そのころ(1970年代の後半)は、潤いやアメニティを計画の考え方に取り入れなければならないという提案はありましたが、私の周辺での実際の仕事の場面では「どれだけ効率良く詰め込めるか」に重点がおかれ、環境に配慮した計画は概して「夢のようなプラン」と受けとめられていました。



その後夫の都合で渡米し、建築の図面を描く仕事に巡り合え、1年間という短い期間でしたがなかなか面白い体験をしました。滞在していたピッツバーグは東部の中堅都市で、古い町並みが残り、築70年程の木造5階建ての建物が商店として活用されていました。私は巻尺と画板を持って築60~70年の住宅に行き、その図面をおこす仕事を主にしていました。初めは言葉のことが一番の障害と思っていましたが、実際に大変だったのはヤードとインチという12進法に慣れることでした。縮尺も1/48、1/24という12進法なのです。また、誤りには○で合っていればまたは×という印にもなかなか馴染めませんでした。日本ではあまり褒められることのなかった私の図面も、手先の器用な人があまり多くないアメリカでは上手だと褒められ、「評価」というものがとても相対的であると感じました。

今、学生としてアフリカの研究をしているのは17年前のこの異文化体験とどこかでつながっているように思われます。

9210014 佐藤久美子

私は、福島県喜多方市に四人姉妹の長女として生まれました。実家が工務店でしたので当然建築に進むものと周りも思っていたし、私自身も、小学校卒業の時に将来の希望として「一級建築士」とかなり具体的に書いて提出しました。ピアノで音楽に進むのか、建築をやるのか、中学入学をきっかけに母に人生の選択をせまられた訳です。何しろ後に妹達が控えていましたから。私は音楽と美術が得意科目でしたので、数学、物理等のある理数系はとてもしんどく、つらい思いで学生時代を過ごしました。そう言う意味では人間好きな道に進んだ方が伸びるし、幸せだと思いますが不得意でも特別優秀なレベルを望まなければ何とか行けると妙な自信をつけました。



今は仕事が好きです。小さな建設会社で営業から設計、積算、契約、現場管理、引き渡しまで全ての書類作成を含め一貫して仕事をしています。特に私は現場が好きで力仕事もやり、2tダンプも運転します。好きだった音楽は今も続けています。月一度の先生のお稽古以外は、毎日仕事の帰りにスタジオを借りて一人でレッスンしています。歌姫になるこの時間が私の安らぎであり、建築の仕事がますますいとおしく思える一瞬です。念願だった音楽会も昨年6月に開くことが出来、130人の方々に歌を聞いて戴けました。UIFA JAPONの皆様にもこの紙上を借りて御礼申し上げます。今にして思うと、つらい思いも無駄ではなかったようです。

9210016 白井 正子



1976年にイランのラムサルで第4回大会が開催されて参加してからがUIFAとのお付き合いの始まりである。約半年程前に竣工した建物の小倉ステーションビルの写真と設計図をパネルに仕立てた展示作品を携えて参加した。先に送ったパネルが現地に着いたか未確認で不安のまま出発したが展示会場で見つけた時には遠くにあったイスラム圏が急に身近な存在に感じた思いを覚えている。

私と建築との出会いは若い頃の話に戻る。体を壊して夢も希望も見出せない時期を過ごしていた頃である。まだ幾年かは生を受けた身でこの世を過ぎなければならぬのに全ての事を悲観的に捉えてしまう。創造性を見出す方向を目指すにはどうしたらよいか、建築は当時新分野であり女性が仕事と心得たとしても不思議ではないだろうと、何かを考える時には根本があって始まるから文字と目で確かめて考えをまとめることは建物を構築していく過程も同様ではないか、建築の勉強へ進むことにする。卒業したての頃は建築は住宅設計から始まるとセンスの乏しさも若さ故か気にしないで住宅を主としている設計事務所スタートすることにして2〜3年後には構造設計をやりたいとチャンスを探した。男性でも構造設計者は少なかったので諦めようかと思っている頃に女性でもやる気があればくると友人からの報せで飛ぶように話ののって構造に入ったのが青木豊建築設計事務所の前身で以来30年近く続けてから後、退所。

9610097 上野 勝代



昨年のハンガリー大会を機に入会しました。よろしくお願ひします。私自身は住居学科の出身で、現在は教えてもいるのですが、建築士の資格も持たず、実務経験を持っていないので、入会するには、少し恥ずかしい思いでしたが、職業としての女性建築家に尊敬と関心を持ち、あの大好きなブタベストにもう一度行きたいという思いもあり、加えていただきました。ありがとうございます。しかし、肝心のブタベストでは、体調を崩して、行事には参加できず、失礼しました。私は勝代という名が表すように1945年3月日本の敗戦間際に8ヶ月の未熟児として生を受け、以後、公害の町で大きくなりました。1963年に奈良女子大学に入学したのですが、当時同大学は住居保健科でして、私の関心は住居よりも、後者の保健にありました。以後、建築学生会議の住宅問題研究会、故北村君先生の家事労働や女性問題、そして京都府立大学での故吉野正治先生との出会いが今の私となったように思います。とくに、故吉野先生は新しい生活様式の在り方、くらしと協同、シンプルライフ、美しい生活と、その考え方にはハッとさせられます。私は貧しい家庭に育ち、祖母は中途失明の中で、“問題論”は見えやすいのでいいが、批判はできても、これだけでは良いもの、人の心を打ち、つくるものはできません。皆様方から学ばせていただきたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

9610099 高橋 尚美



初めまして。私は、東京都住宅供給公社に勤務する高橋尚美と申します。1996年のハンガリー大会で初めてUIFA JAPONの活動に参加させていただきました。10年前に訪れたことのあるブタベストの変化を見たい、そんな好奇心が参加の動機でしたが、それよりも世界中の建築家の方々にお会いできたことは、貴重な経験となりました。どうもありがとうございました。

私は、現在大学を卒業後2年間、都営住宅の管轄工場の設計・工事管理部門で働いています。入社当時は現場の足場さえ登ったこともなかった私ですが、今や40mの給水塔のてっぺんから東京の町を見下ろすほどの度胸だけはいつてきました。大学時代から集合住宅、特に「集住」人が集まることで生まれるソフト・ハード両方の可能性に魅力を感じ、コーポラティブハウス・コレクティブハウスづくりを目指し、公社に入りました。現実には組織の保守化は進み、私の夢を語り合う仲間もおらず、悶々とする日々です。しかし都営住宅の持つ、昔ながらのコミュニティーや緑豊かな環境を住民と育て、まちづくりの起爆剤にしたり、都市に住む人々の新しい住まい方の動きを拾いあげ、サポートする存在になるなど、未来の公社像を胸に、なんとかがんばっていこうと考えています。

9610105 栗山 楊子



今年、会員になったばかりです。その前にUIFAハンガリー大会に参加し、世界の女性建築家達の活躍、年齢を感じさせない若さと行動力とで社会をリードしている姿に刺激され、私も仲間の一員となり、もっと勉強もし、仕事を通しての取組みにも役立てたいと思っております。

大成建設設計部、TRIAD 建築設計事務所に席を置いて30余年、個人住宅、集合住宅、リゾートハウス、ヒルトンホテル内店舗等の設計の仕事に関わって来ました。好きであるが故に忙しさも苦にならず個性的なクライアントにふりまわされながらも、人それぞれの美意識や価値観に学び、そこに生活する人々の生活形態に合わせた住空間を作る事を考えて仕事を続けて来ました。

現在は、東京ガスグループの中で、リフォームアドバイザーとしてマンションや住宅のリフォームの仕事を、また寺田トランクルーム・リビングSOSのカウンセラーとして、住まいと収納に関して種々の取組みをしています。

今、私の仕事場のある川崎市百合丘周辺では、高齢者と同居、又は高齢者のみの世帯が非常に多くなっており、世の中不況の折りと重なり、リフォームの要望が多くなってあります。そこで、生活者の視点を大事にし、今の住まいの問題点を見極め、安全性と暮らし易さを考え、住まいのカウンセラーの役を現在引き受けてあります。

## ■私の考える環境共生時代の住まい

夢工房 古居みつ子

「環境共生時代の～」は、幅広いテーマですが、「共生の住まい」というキーワードで、ワークショップに取り組める（参加する）ことができたらと思っています。



これには、器としての建築（供給方式を含む）をつくるという側面と、生活者の住み方という面の双方の切り口ができるかと思えます。住宅をつくることだけに視点を置いてしまうと（これも興味がありますが）、参加が建築関係者になってしまいます。折角の機会なので、どう住まい手が生き方と重ね合わせながら使いこなしているかも焦点にあてることができたらと思います。

環境共生の時代は、様々なスタイルの生き方が、可能な、可能にしていく時代ではないかと思っています。その実現をするための、そしてそれを通じての共生の完成を共有することのできる住まいという趣旨です。このように言うてしまうと、住まい手自らが参加して作り上げているコミュニティは、全て該当することかまわありません。

昨年デンマークで、グループハウジング（コ・ハウジング）の事例を見学してきました。その説明をして下さったコーディネーターは、建築の専門家ではなくケースワーカーの方で、こういう住み方が、今後は必要であると言われたことが印象的でした。また、供給システムが制度化されていないということでは、日本と変わらないのですが（側面的支援は大きく異なるのですが）、このような住まい方に市民の関心は高まっていて、デンマーク国内でも話題を呼んでいるということでした。ヨーロッパでの集まりもあるとのこと、国内外での関心が高まっているように感じました。アメリカでは、コ・ハウジングを専門に扱っている組織もあります。「共生」というのは、物理的な条件としての集合的に住む住み方を、ソフトの上でもメリットのある住まい方にしていこうという試みではないかと思えます。

いろいろな試みが世界中で、取り組まれているのではないのでしょうか。

このあたりになりますとご専門の方々がおられることと思いますので、国際的な組織との連携を取っていただいて、その集まりを兼ねて行っていただくことも、実務を行っているものとしてはありがたいです。

原稿の締切りが今日だということがわかって、慌てて書いているところです。

先月のワークショップに参加しまして、私なりのスタンスを羅列しました。面白そうだと思っただけの方がありませんら、大会の中でのワークショップ開催の準備を一緒にお手伝いしてみませんか。

## ■第12回海外交流会

建築家 キャロル・マンク

私は、ちょうどさくらの咲く頃に、大阪府立大学に学ぶ目的で初めて日本にやってきた。最初羽田空港に着いたが、景色を見たいと思い大阪までは飛行機でなく、有名なBullet Trainに乗ることにした。その日、新幹線はととも混んでいた。今思えば、その日はちょうど、大安の日曜日で、結婚式に行く人が多かったはずなのだが、それを知らない私は、日本人って何というおしゃれな人々だと驚いた。私の大きい荷物やジーパンに登山靴といういでたちは、1977年4月10日の新幹線の雰囲気にも、まったくそぐわないものだった。



あれから20年になる。2年間日本庭園や民家を見て歩き、東南アジアにも足を伸ばした。その後一時的にアメリカに帰国し、大学院を経て、希望する設計アトリエにも勤務することができた。1987年に米国建築士の資格を取り、ある意味で一人前になりつつあったが、留学時代から密かに抱いていた思いが時おり小さな声で平凡な日常生活を送っていた私に呼びかけた。留学時代に感じた事のなかで最も大事なことは、世界は個人の集まりで、つまり個人の力の集合により動くものであるという感覚であった。そして私の様に、いつも心に余裕を持ちすぎる人間は、自分の職業を通して自分なりに世界の理解のために働くべきではないか考えた。翌1988年、今度は夫のマイケルと共に、再度日本を訪れることにした。

夫は日建設計に入社し、1年後、私も同社に契約社員として入った。それから7年間、政治的な理由で海外の設計事務所を参画させた公共施設の設計チームに加え、3つの大規模なプロジェクトを手がけた。95年に一級建築士の資格を取得、アメリカの最大の設計事務所であるHOKの東京事務所副社長となり、老人施設の設計を担当することとなった。そのプロジェクトでは、輸入仕上材料や家具を積極的に使用することにより、異なる意味での国際的デザインを経験した。97年2月に独立、建築家、デザイナー、アーティスト等、あわせて23人が共同で開いたオープンスタジオ（オプスタジオNOPE）の一角で独立した建築家としてスタートしている。

日本で係わったプロジェクトは全て、アメリカ人と日本人の共同作業によるものであるが、プロジェクト毎に異なるチーム構成やデザインプロセスを取り入れた。ここでは、こういった経験の話をすることを通じてUIFAの方々と共に、プロフェッショナルレベルでの国際交流の可能性を考えたい。まず3つの公共施設—国立横浜国際会議場（日建設計とニューヨークのマンシーニ・ダッフィ・アソシエイツの設計共同企業体）、仙台空港新旅客ターミナルビル（日建設計とHOK設計JV）、東京テレコムセンタービル（日建設計とHOK設計JV）—を提示し、公共建築のあり方を探ると同時に、国際設計チームによるデザインプロセスを客観的に分析する。続いて、外国人建築家の日本での活動のあり方の1つとしてHOKの老人施設を紹介、あるいは将来の国際的活動の将来像として、オープンスタジオNOPEの可能性についても言及する。そして最後に、UIFA 98年日本大会に向けて、個人的な期待を述べたい。

# Union Internationale des Femmes Architectes Japon

## UIFA JAPON 事務局

〒102 東京都千代田区麹町2-6-5  
麹町E・C・Kビル ㈱生活構造研究所内  
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

### ■ドキュメント2 -UIFA日本大会に向けて(1997年1月29日~1997年3月20日)-

1月15日 東京建築士会より「建築東京」への原稿依頼あり、4月号にUIFA世界大会のうごきをテーマに掲載予定。広報委員会を担当。

1月17日 ㈱日本建築士連合会・㈱東京建築士会・㈱日本建築家協会へUIFA日本大会後援承諾願を提出。

1月17日 デンマークより'91年大会の資料いただく。

1月17日 ㈱日本建築士連合会より後援の正式承諾の回答。

1月24日 元文部大臣赤松良子氏と懇談。大会名誉顧問として就任要請に承諾いただく(小川副会長・渡辺(喜)・松川理事)

1月27日 オリンピック記念青少年総合センターの施設見学(中原会長・小川副会長・渡辺(喜)・小渡・松川理事)

1月29日 第11回役員会で日本大会準備ワークショップ総括と日本大会の準備に関する議題の検討。

1月30日 ㈱日本建築学会会長、尾島俊雄氏と懇談(小川副会長・松川理事)、協力関係について建築学会事務局長にヒアリングの予定。(松川理事)

1月31日 会場の候補として多摩交流センターへヒアリング(松川理事)。この会場は多摩地区に限定されたアマチュア集団のみに助成のため資格がないことが判明。

2月1日 赤松良子氏へ「名誉顧問就任願」を正式に依頼、送付。

2月3日 エイボングループサポート応募要綱入手。(締切り3月7日)。

2月5日 会議会場候補の国立オリンピック記念青少年総合センターの森課長・大枝氏と懇談(中原会長・渡辺(喜)松川理事)。会期、会場、宿泊室等の予約について。詳細は5月見直しの予定。

2月5日 ㈱東京女性財団事務局長高田氏・次長角田氏と懇談(中原会長・松川理事)東京大会の具体的な支援を書面で提出予定。

2月6日 サンフランシスコ在住のI.S.ホートンさんより手紙。アメリカの建築団体のリスト送付される。

2月7日 ㈱横浜コンベンションビューローより3月14日開催の「横浜説明会」の案内状が送付され、小渡理事が参加の予定。

2月7日 総合研究開発機構石田部長にヒアリング。

2月14日 元文部大臣赤松良子氏より名誉顧問就任の正式承諾の回答をいただく。

2月18日 第12回役員会に中原会長・小川副会長作成のUIFA第12回世界大会組織委員会編成案が提出される。

2月19日 ㈱日本財団企画課長鈴木氏と懇談・㈱国際交流基金企画室、交流相談室、塩澤氏と懇談(安藤・松川理事)

2月19日 東京都生文局国際交流課訪問(鎌・榎・靉(靉)轉)

2月22日 ド・ラ・トゥール会長より手紙。内容は新年の挨拶と日本大会についてのアンケート。

3月7日 エイボングループサポート助成申請(安藤理事)

3月7日 UIFA日本大会のための第1回実行委員会開催のお知らせ(3月20日、ECOプラザ)

3月12日 総合研究開発機構(NIRA)星野進保理事長と懇談(松川理事)

3月17日 日本労働組合総連合女性局長と懇談(渡辺(喜)理事)

3月18日 建設省関東地建、頼課長と懇談(松川理事)

3月18日 公園緑地協会理事長と懇談(小川副会長、松川理事)

3月4~17日 UIFA日本大会実行委員会各部会開催。

川嶋 幸江

### ■役員会の報告

第11回役員会(97年1月29日)役員10名出席、議題;日本大会準備ワークショップ(1月15日)の総括。東京女性財団助成研究について、第12回UIFA日本大会準備について。

第12回役員会(97年2月18日)役員10名出席、議題;報告、今年度残り事業について、第12回UIFA日本大会準備について。

第13回役員会(97年3月18日)役員12名出席、議題;報告、3月20日の海外交流の会について、東京女性財団助成研究について、'96年度総括及び総会準備作業、第12回UIFA日本大会準備について、名簿作成について。

### ■広報日より

3月もあと数日 桜の開花が始まり 時まさに春  
そして 3月20日春分の日 UIFA第12回日本大会実行委員会がいよいよ発足しました。会長、副会長、そして実行委員長 松川理事を頭とする総勢30余名、まだ足並みは不揃いですが、開催に向けての準備が着々と進んでいます。

担当: 飯島、川嶋、渡辺、柏原、田中、大高、緑川